

天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村、

入唐使に贈る歌一首 并せて短歌

一四五三番

玉たまだすき かけぬ時ときなく 息いきの緒をに 我あが思おもふ君きみ
は うつせみの 世よの人ひとなれば 大君おほきみの 命みことかしく 恐こ
み 夕ゆふされば 鶴たづが妻つまよ呼よぶ 難波なにはがた瀉た 三津みつの崎さきよ
り 大舟おほぶねに ま梶かぢしじ貫ぬき 白波しらなみの 高たかき荒海あるみを
島伝しまづたひ い別わかれ行ゆかば 留とどまれる 我われは幣ぬさひ引き
斎いはひつつ 君きみをば遣やらむ はや帰かへりませ

反はん歌か

一四五四番

波なみの上うへゆ 見みゆる小島こしまの 雲くも隠かくり あないきづか
し 相別あひわかれなば

一四五五番

たまきはる 命いのちに向むかひ 恋こひむゆは 君きみがみ
舟ふねの 梶柄かぢからにもが